

「木場の窓から見えるもの(元外交官の視点)」

当社顧問石井正文氏(前駐インドネシア日本国大使)による
気になる海外情報を原則第2、第4木曜日に配信しています。

第58回:リー・クアンユー生誕100周年記念セミナー参加印象記 2023年10月12日配信

【ポイント】

- 標記セミナーに参加した印象;チャタムハウス・ルール(※参照)なので、個別の発言の扱いは要注意
- ・ シンガポール政府は、首相、副首相、上級大臣他が出席し、重視
- ・ 筆者が提起したASEAN分断深刻化と選択と集中は、ショッキングに過ぎたかもしれず
- ・ 台湾問題では、米中対立の構造的要因を理解しつつも、紛争発生を抑止を最重視。
更に「一つの中国」を変えないこと基本とした、若干中国寄りの立ち位置
- ・ シンガポールは、米中仲立ちの役割を意識
- ・ 重要問題については、金太郎飴的の反応=政府内の意思疎通が大変緊密

【本文】

- 10月4日~5日にシンガポールで実施された「リー・クアンユー生誕100周年記念セミナー」に参加。
シンガポール政府の重要視の度合いは、参加者からも明らか
- ・ ストレート・タイムズ、ビジネスタイムズ、聯合早報等を傘下に収めるシンガポールのメディア会社
SPHメディアが主宰し、シンガポール外務省も支援
- ・ 冒頭スピーチはテオ・チーヒン上級大臣兼国家安全保障調整大臣。初日のリー・クアンユーを回顧する
メインセッションには、馬英九前台湾総統、ジョン・ハワード元豪首相、一時は首相後継候補と目された
ヘン・スイキヤット副首相兼経済政策調整大臣(リー・クアンユーの秘書官)が参加
最終セッションでは、リーシェンロン首相が1時間半出席し、冒頭発言+各種質疑応答をした。
- ショッキング過ぎたASEAN分断と選択と集中?
 - ・ 筆者は、初日午後の並行セッションの内、地政学に関するものGeopolitics - “The Shifting Balance of Power in Asia - Implications for Regional Diplomacy & Security”に、南洋理工大学のジョセフ・リオウ教授と共に
パネリストとして出席。
 - ・ 当方からは、いつも通り、今後の趨勢として、2030年G3(米中印)登場、2040年にインド・インドネシアの
立ち位置が世界の多数派を決める。一方、ASEANは既に實際上4つのグループに分裂しているのが
益々深刻化する、それに対して日本は、ASEAN一体性支持の表看板は変えないが、その範囲で一層の
テーラード・アプローチ(換言すれば資源が限られる中で、二国間関係での選択と集中)を行うと説明。
一方、リオウ教授は、ASEANの一体性維持のASEAN各国にとっての重要性を説く、という流れだった。

- ・当方としては、小国としてASEANの中で最も一体性の利益を感じていると思われるシンガポールの聴衆に対しては、相当挑発的な発言をしたつもりなのだが、セッションでは、殆ど反応が無かった(シンガポールは、米中両方を選択しても許される希少な例外国との説明に対しては、出席者から苦笑が漏れた。)。ただ、セッション終了後、幾人かから、個別に追加的質問や評価の表明があり、一応耳には届いていたのだと少し安心した。
- ・もしかしたら、ちょっとショック療法が過ぎたのかもしれない。

■台湾問題での明確な立ち位置

- ・実は、セミナーには、9月13日に「台湾は中国のコモンウェルスに入り「一つの中国」を実現すべき」と台湾でのセミナーで発言し、台湾「外交部」から「中国の代弁者」と批判されていたジョージ・ヨー前外相も参加し、社会的変革のセッションでスピーカーを務めたが、当然のことながら、彼の発言に対する質問は皆無だった。
- ・台湾関係で面白かったのは、第一に、リーシェンロン首相を含むシンガポール政府の出席者が、皆、グラハム・アリソンの著作『米中戦争前夜——新旧大国を衝突させる歴史の法則と回避のシナリオ』(2017)に言及したことだ。それぞれ他のメンバーの発言には同席していなかったので、首脳部の間で同じ本を読み、同じ議論をしているのだろう。
- ・この著作は米中が既存勢力が新興勢力の台頭を脅威に感じ構造的な形で双方が紛争に至るという「ツキジテスの罠」にかかっており、紛争発生の可能性は高いが、具体的に努力すればそれをストップすることは不可能ではない、という論旨だ。
- ・当然ではあるが、シンガポールの最優先課題は他国と同様に、米中紛争の抑止と回避だ。ただ、その為の方策として、政府関係者が述べたのは「一つの中国」の厳守である。
シンガポールの「一つの中国」は国際社会は、「台湾は中国の一部」という中国政府の主張を理解する形で台湾との関係を非政府間の実務関係として維持してきており、台湾をめぐる問題が兩岸の当事者間の直接の話し合いを通じて平和的に解決されることを希望民するとの立場を取っているため、台湾が普通の国であるかのような印象を強めるような対応を取るべきではない、ということのように聞こえた。
- ・リーシェンロン首相のセッションに出席していた馬英九元総統は、シンガポールは過去2回中台の直接対話をホストしており、今や3回目が必要となっているので、是非再びホストして欲しいとして、聴衆に、支持を示すべく拍手をするよう求める場面があった。
- ・ともかく、大分日本国内の雰囲気とは違う感じを痛感した。これが、米空海軍をホストしているシンガポールの感じであり、更に東南アジアの皮膚感覚であることは、良く理解しておく必要があると思った。

■米中の「仲立ち」の役割を意識+金太郎飴的対応=政府内の意思疎通が緊密

- ・もう一つ、シンガポール政府出席者が皆、同じことに言及したのは、過去シンガポール(より正確にはリー・クアンユー)が米中の仲立ちをした例だ。
- ・一つは米軍のベオグラードの中国大使館誤爆事件(99年5月)への対応。もう一つは、EP-3Eと中国側戦闘機の接触事故(01年4月)への対応。
このそれぞれについて、リー・クアンユーは米中双方から相談を受けて、妥協が双方にとっての利益だと説いたと言うことだ。基本は、リーは中国側に対しては、ここで米国を余り追及しないことは、課題になっていた中国のWTO加盟(01年12月実現)にとりプラスと説明し、米国には、中国側はそれを考慮するはずだから、早期に謝罪し手打ちした方が良く、と助言したらしい。
- ・この話を閣僚クラスの間が皆するので、大変に面白かった。意思疎通が如何に緊密かを示すものだ。
- ・更に、この関連でもう一つ。当然のことながら、聴衆からは、「仮にリー・クアンユーが生きていたとすれば、現在の米中対立にどう対応したと思うか」という質問が寄せられたが、これに対する回答も、皆同じだった。即ち、習近平が、鄧小平が生きていたら、という文脈で同じことを聞かれ、「鄧小平も全く同じことをしていたはずだ」と自信たっぷりに返答したことを引用しつつ、シンガポールではそうはいかない。
ともかく、リー・クアンユーはもういないので、彼にそれを聞くことは出来ず、我々は自身で判断せざるを得ないのだ、という返事をした。ここまで応答ぶりをすり合わせるとは...つまらないが恐るべき国である。

※チャタムハウスルール(英: the Chatham House Rule)とは、議論の開放性を高めるため考案された規範。会議に参加する人は誰でも自由に意見を述べるができるが、特定のコメントをした人を明らかにすることはしないと規定する。

以上

りそな総合研究所 顧問 石井正文